

博報堂教育財団 第15回、16回「日本研究フェローシップ」

成果報告書

I. 研究成果概要

氏名（フリガナ）	出丸香（イデマルカオリ）
在住国名	アメリカ
所属・役職	オレゴン大学 教授
招聘回（招聘研究期間）	第 16 回 （2021 年 9 月 1 日～ 2022 年 2 月 28 日）
受入機関	国立国語研究所
招聘研究テーマ	日本語における外国語なまりの要因と影響
研究目的	外国人人口が増加傾向にある中、外国語訛りのある日本語がどのように受け止められ、どのように評価されているのか調べるため
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか（具体的に）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● じっくりと時間をかけて先行研究を精査し、現在の外国語訛研究分野に新しい知見をもたらすような研究デザインを計画した。 ● 本研究の発表や他の研究者の方々とのディスカッションを通して、コロナの影響によるデザイン変更の解決法を探りつつデザインを詰めた。 ● 国立国語研究所の学習者コーパスから音声刺激を選定し、これを加工して、実験用の刺激を作成した。これで、中国語話者、英語話者、韓国語話者それぞれ3人ずつから、20－30件の刺激が出来た。 ● プログラミング担当者と共同し、計画した一番ベースとなる実験デザインを実現するようなプログラムを作成した。 ● 実験プログラムを試験的に実施し、フィードバックを元に修正。 ● クラウドソーシングのプラットフォーム、「クラウドワークス」を、本実験に使えるかどうか調査。 ● 「クラウドワークス」を利用して、オンライン上で実験を実施。46名からデータが集まった。 ● 集まったデータについて、記述統計により基本的な傾向を調査した。 	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか（具体的に）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 同じ音声刺激を聞いていても、「今から話をするのは中級日本語話者です」と言われると訛の知覚が高くなり、「上級日本語話者です」と言われると、知覚する訛は低くなる。日本人も日本語での外国語訛の知覚は、主観や思い込みに影響されると言えそうである。 ● 内容理解に関しては、話者が中級日本語話者と言われても、上級話者と言われても、その正確さは変わらなかった。これはポジティブな傾向で、「中級レベル」と言われても、手を抜かずちゃんと聞く努力をしている事を示している。 	

- ただ、このように内容理解の正確さが変わらない2つのグループでも、訛の知覚の度合いが変わるというのは興味深い結果だと言える。

3. 研究成果（予定を含む）

○論文（題目、掲載誌、発行者、掲載月、内容の概略（200字以内））

・ Foreign Accent in Second Language Japanese: Acoustic sources and Listener Factors. Proceedings of the Technical Committee on Speech Communication: The Acoustical Society of Japan. Vol 1, No 2, Dec 2021.
・ 本論文では、日本語における外国語なまりの音響要因に関する先行研究をまとめ、また（日本語のものはないため）英語における外国語なまりの聞き手要因に関する先行研究を紹介し、日本語でも聞き手要因を調査する研究が早急に必要であると議論した。

○口頭発表（題目、イベントの名称、日・場所、内容の概略（200字以内））

・ Foreign Accent in Second Language Japanese: Acoustic sources and Listener Factors. 日本音声学会・音声コミュニケーション研究会・定例会、12月11日、オンライン開催。上記の論文にまとめたものを、口頭発表した。

・ Foreign accent: Speaker, speech and listener factors. 早稲田大学、近藤ゼミ、11月1日、早稲田大学。大学院生、学部生を含む音声学のゼミで、外国語訛に関する先行研究を紹介し、特に英語における聞き手要因を調査する紹介し、日本語の研究への応用（本研究）の方法について議論した。英語での発表。

・ 日本語における外国語なまりの音響特性と聞き手による要因。早稲田大学、原田ゼミ、1月14日、オンライン参加。上と同じ。日本語での発表。

○その他の活動

- ・ 1月7日、早稲田大学、原田ゼミ、音声学に関する院生、学部生のディスカッションに参加。
- ・ 1月17日、上智大学、荒井ゼミ、音声学に関する院生、学部生とのディスカッションに参加。
- ・ 2月7日、大阪外国語大学同窓会、東京支部月例会、音声学を紹介する講演。本研究も紹介。

4. 今後の活動予定

今回のフェロシップ期間に完成することのできた、ベースラインの実験プログラムを利用し、次の段階のクリティカルな問題に取り組む。その問題には、話者の見た目（白人とアジア人など）がなまりの知覚に影響を及ぼすか、母語によりなまりの preference や bias があるか、またなまりが、知性、人格などの判断に影響してしまわないかなど、を調べる予定をしている。こういった実験は、まとめて国際的研究ジャーナルに投稿する予定である。

以上のものは、オンラインあるいは実験室で、人工的に作成した刺激を使って行う実験であるが、将来的には、日本において外国人日本語話者の働く職場、彼らがサービスを受ける地方自治体の施設、法廷などの現実的な場面での状況などを調べたいと考えている。また、先行研究や自分の研究に基づき、こういった外国語なまりに関する差別の可能性などについて、一般の人々に気づきを与えるような啓蒙活動を行いたい。